類型比較を通して見た砺波平野における村落構成の共通原理

— 砺波散居村における居住特性の分析 その5 —

DWELLING SYSTEMS IN THE TONAMI PLAIN THROUGH A COMPARATIVE STUDY
OF THREE DIFFERENT TYPES OF VILLAGES

A spatial analysis of dwelling system in the Tonami Plain Part 5

黒野 弘 靖*, 菊 地 成 朋**

Hiroyasu KURONO and Shigetomo KIKUCHI

In this study we made clear the spatial composition of villages in the Tonami Plain by comparison among a dispersed village, a row shaped village and a street village. We realized that for all villages the direction in which water flowed was a primary regulating factor relating to things from housing to the homesteads and village composition. There were also farm lands directly connected to the homesteads in all villages. We defined the unit as “living field”. The relationship between a watercourse and a living field was the same in all types of villages. The watercourses flowed along the boundaries of the living field. It meant the three villages were based on the same model.

Keywords: Comparative study, Spatial Composition, Street, Watercourse, Living field, Facing to the street

比較研究, 空間構成, ミチ, 水系, 生活領域, 表示性

1. はじめに

本編は、砺波平野の村落を個と集合のしくみとして分析する一連の研究の続編である。ここでは既に述べた砺波平野の村落形態の分類¹⁾の中から「散村」「列状村」「街路村」をとりあげ、そのケース・スタディを比較検討する。それにより各村落タイプの共通点を把握し、村落形態によらない平野全域にわたる基本的構成原理の存在を明らかにする。そして、同一の気候・地勢条件の中にこうした村落形態のバリエーションが存在する理由を把握する。既報で述べたように、砺波平野には散居と異なる形態の村落も数多く見いだされる。本編ではそれらの中から、「散村」の事例として<天正>²⁾を、「列状村」の事例として<東開発>³⁾を、街路村の事例として<増山>⁴⁾をとりあげ、それぞれの居住特性を比較する。ここで居住特性とは、集落・屋敷・間取りのシステム的な対応関係を指し、これには計画設定や居住者の働きかけが含まれるものとする。今回、事例としてとりあげた散村と列状村と街路村は、いずれも18世紀中頃に村立てされたことがわかっている⁵⁾。そこで、こうした近世の計画が果たしてきた役割を検証することを課題に含めた。なお、現地調査は、1990年10月から1995年11月にかけておこなった。

2. 間取りの比較検討

砺波平野の散村では、主屋は東を向き、その平面は、入口の右側

に土間や台所が来る右勝手の間取りとなっている(図2左)。列状村<東開発>でも、すべての主屋は東向き、右勝手に揃っている(図2中左)。ところが、街路村<増山>では、約半数にあたる街

図1 比較の対象とした村落の形態

* 新潟大学工学部建設学科 助教授・博士(工学)

** 九州大学大学院人間環境学研究院 教授・工博

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Niigata Univ., Dr. Eng.
Prof., Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu Univ., Dr. Eng.

図2 間取りと方位と水路の流れる方向との関係

道の東側の住宅が西を向いている(図2右)。これは、南北に集落を貫く街道に入口を向けた結果と捉えられる。さらにこの西向き住宅は、左勝手となっている(図2右)。これは、南から北へ流れる水路のカミ・シモに、ザシキとダイドコロの位置を対応させたことを示している。つまり、集落の中で間取りを揃えることよりも、水の流れる方向性を優先させているといえる。この原則は、当然、散村や列状村でも守られている。このように形態の異なる村落と比較することにより、散村の間取りが東を向くことではなく、水の流れる方向を第一の原則としていると理解できる。

3. 屋敷構えの比較検討

ここで屋敷構えの構成要素を一つずつ取り上げ、その配置を村落ごとに比較し、相違点と共通点を明らかにする。

3.1 屋敷林(カイニョ)

散村<天正>では、屋敷の4周に植えられている(図3左)。これにより屋敷がランドマークとなり、点在性が強調されている。

列状村<東開発>では、個々の屋敷はカイニョを北側に持たない(図3中)。しかし、敷地が南北に隣接することにより、北側が補われ3方を囲われているのと同じ効果を得ている⁶⁾。つまり、並びを構成することではじめて屋敷としての単位性が獲得される。

街路村<増山>の屋敷林(カイニョ)は、主屋の4周近くに密に植えられている(図3右)。屋敷が街道に沿って並ぶため、前面の屋敷林が連続し、街道は並木道の景観を呈している⁷⁾。

このように列状村や街路村では、集合を前提として屋敷林が位置づいており、屋敷構えが集落の単位として意味を持っている。こうした構成要素の組織化をユニット化と呼ぶことにする。

3.2 納屋(ナヤ)

散村<天正>では、ナヤが屋敷のマエ側かつシモ側(ウラ)に配置されている(図3左)。列状村<東開発>のナヤも、マエ・シモの位置にある(図3中)。しかし、街路村<増山>のナヤは、屋敷のセド側かつシモ側に配置されている(図3右)。

また、列状村のナヤの外装は、多くがクラと同じ漆喰塗り込め仕上げとなっている。列状村<東開発>では、クラがマエ側にないために、ナヤが代わりに表示性を担ったものと解釈できる。

また、列状村や街路村では、ナヤの位置が各屋敷で揃っているため、屋敷の前庭(列状村)や後庭(街路村)が隣家のナヤで囲われるかたちとなっている。これは屋敷林と同じユニット化といえる。

3.3 倉(クラ)

散村<天正>では、クラが屋敷のマエ側かつカミ側に配置される(図3左)。一方、列状村<東開発>や街路村<増山>では、セド・シモに配置されている(図3中・右)。列状村や街路村の敷地は、間口が狭く奥行きが長い。この敷地形状に合わせてクラをセド側に移したものと解釈できる。とくに街路村のクラは、主屋のダイドコロと渡り廊下でつながり、主屋と同じ下見板張りで覆われており、外観的には、クラとしての表示性をもたない。

図3 屋敷構えの構成要素

3.4 灰小屋（ハイゴヤ）

散村<天正>では、ハイゴヤが屋敷のマエにあったという。圃場整備の際にとりこわされて、現存しない。列状村<東開発>では、全58軒中の19軒に見られ、多くが宅地のマエかつカミ側にある（図3中）。屋敷のマエ側には、水路や耕地が広がっているため、防火や施肥の点で都合がよい。街路村<増山>でも、全72軒中22軒に見られ、これらはマエ側かつカミ側にある（図3右）。ただし街路村の水路や耕地は、屋敷のセド側にあるので、このハイゴヤの位置は、防火や施肥に有利とはいえない。その理由は表示性と考えられる。すなわち街路村においては、ナヤやクラがミチに面さないため、ハイゴヤをマエ側に配置し、屋敷の表情としていると解釈できる。実際に街路村<増山>のハイゴヤは技術を凝らしてつくられており、「ハイナヤ⁸⁾」と呼ばれている。

3.5 石垣（ハドリ）

散村<天正>では、屋敷のマエ側、セド側、カミ側の3方に回すことを原則としている。庄川の付近に立地する屋敷では、カミ側をとくに高くして溢流水に備えた例も見られる。列状村<東開発>では、ハドリが屋敷のマエ側（庄川に近い側）だけになっている。街路村<増山>では、屋敷のセド側に見られる⁹⁾。

このように列状村や街路村の屋敷には、ハドリが1辺にしかない。しかし、屋敷が並ぶことにより、ハドリがミチ沿いに連続する。そして、集落レベルでのミチのデザインが成立している。

3.6 貯水池（ホリ）

散村<天正>では、屋敷のセド側かつウラ側にある（図3左）。これは主屋のダイドコロに面しており、その水は生活・飲料用として使われた。街路村<増山>でも、ホリ（貯水池）は屋敷のセド・ウラ側にある（図3右）。つまり、ホリは、ダイドコロに近いカワ（水路）沿いに設置されているといえる。

3.7 構成要素の配置を通してみた原則

以上の分析により、屋敷の構成要素の相違点や共通点を生む要因として、つぎの三つを指摘できる。これらは居住者が住みこなす過程で蓄積した原則と捉えられる。

1. 隣接関係の利用 列状村や街路村の屋敷林やナヤは、屋敷が隣接することを前提として、各屋敷の環境が完結するかたちになっている。また、その石垣は、一辺だけにつくられるものの、屋敷が並ぶことによりミチ沿いに連続する。このようにユニット化している。
2. 表示性 列状村のナヤが漆喰塗り込め仕上げとなっていること、および街路村の灰小屋が凝ったつくりとなってマエ側に配置されていることは、屋敷のマエ側に対する表示性を示している。
3. 間取りとの対応 貯水池（ホリ）の位置は、いずれの村落においても変わらない。これは、主屋のダイドコロとの関連が強いため、その位置が定まっているものと考えられる。

4. 集落の構成と屋敷構えとの対応

屋敷構えの要素の相違には、前述した3つの要因だけでは説明できない事象がある。これを集落構成との対応から説明する。

4.1 「イエの領域」の広がり方

村落形態ごとに、1軒の所有する生産耕地の広がり方をみる（図4）。散村<天正>では、屋敷と連続して所有する水田のほか、1筆単位で分散する水田を持っていた。屋敷まわりの水田をコシメグラ、離れた水田をトオタンボと呼び区別している（図4上）。

図4 1軒の領域モデル

列状村<東開発>では、屋敷の東側に連続して「マエノタ」を、川沿いに1筆単位で分散する「カワラダ」を持っていた（図4中）。

街路村<増山>では、屋敷のウラ側に連続して「セドノタ（ヤシキダ）」を持ち、離れたところに「ヒガシノタ」「ニシノタ」と呼ばれる耕地を持っていた（図4下）。

このように、どの村落形態においても、1軒の生産耕地は、屋敷と連続したものと、屋敷から離れたものとの二つがある。とくに屋敷と連続した耕地は、固有の呼び名を持ち、苗代や肥沃な土（ドロ）をつくる場所となっていた。こうした宅地と連続した耕地という原則は、砺波平野の村落全体に共通する、耕地所有のモデルといえる。そして、村落景観の形成にとって、この屋敷と連続する耕地の存在は、きわめて大きい。散村の場合、この耕地が宅地の周囲をとりまくことにより宅地間の距離が保たれている。列状村の場合、この耕地が宅地のマエ側に揃うことにより、屋敷の並びの間に「マエノタ」の層ができ、列状の構成がはっきりとわかる。街路村の場合には、これが宅地のセド側に揃うことにより、屋敷林の位置を主屋付近に限定し、周辺の水田地帯との区分を明確にしている。

この宅地と連続した耕地は、屋敷構えの構成要素の位置にも影響している。ナヤは、散村と列状村で屋敷のマエ側、街路村でセド側にある。これは、街路村の宅地と連続する耕地の広がり方に対応するものとなっている。つまり、宅地と連続する耕地に近いところに、農作業と関わりの深いナヤが配置されている。

図5 「イエ」の領域と水路やミチとの関わり

4.2 「イエの領域」と水路との対応

水路(カワ)は、屋敷構えの構成要素の位置に大きな影響を及ぼしている。まず何より、要素の位置は、水路の流れる方向(カミ・シモ)を根拠に決まっている。さらに要素の中には水路と関わりが深いものがある。貯水池(ホリ)は、水路沿いかつ主屋のセド側(ダイドコロに近いところ)に設けられる。つまり水路は、ホリを介して主屋のダイドコロと接続している。

つぎに、水路と「イエの領域」との対応を見る(図5)。

圍場整備前の散村<天正>の水路は、網の目状に見える。しかし、これを各戸の「イエの領域」と重ね合わせてみると、その領域の境界を流れるものと、領域内を通り屋敷を束ねて流れるものとに区分できる(図5上)。このうち領域内の水路は、つねに主屋のセド側を通り、そこには貯水池(ホリ)がつくられ、生活・飲料用の水源として利用されていた。

列状村<東開発>の水路は、直線的に流れている。「イエの領域」と重ね合わせてみると、領域の内側を通る水路と、領域の境界を通る水路とに区分できる(図5中)。領域の内側を流れる水路は、ミチと対になって、屋敷のマエ側を束ねるように流れている。一方、境界を流れる水路は、屋敷のセド側のクラに面したところと、マエ側の耕地(苗代田や畑)の端を流れている。

街路村<増山>の水路は、長く直線的に通っている。「イエの領域」と対応させてみると、マエ側の境界に芹谷野用水が通り、セド

側の境界に水路が通っている(図5下)。さらに「イエの領域」の内側の、主屋のセド側にも、屋敷を束ねて流れる水路がある。

以上から、形態がまったく異なる3つの村落タイプは、水路と「イエの領域」との対応に注目すると、同じ構成をもっているといえる。すなわち「イエの領域」の境界を流れる水路と、その領域の内側を流れる水路との2種類がある。また、内側を流れる水路に沿って、洗い場や貯水池が設置されている。さらに「イエの領域」は、主屋に対して、屋敷を束ねる水路の側に広がっている。

列状村<東開発>や街路村<増山>の水路は、「イエの領域」の境界上も内側も、長く直線的である。この事実は、列状村や街路村の設立時に、計画設定があったこと、そして、計画の際に宅地と連続した耕地を含めた「イエの領域」が単位となっていたことを示している。また、どの村落形態においても、主屋のセド側に水路が流れていることから、主屋のセド側にダイドコロがくるという間取りや、水路にホリを設けて飲料水をダイドコロに運ぶという生活が想定されていたと考えられる。

4.3 ミチと屋敷構えとの対応

つぎに、それぞれの村落におけるミチの通り方を屋敷構えとの対応に注目して分析する。

散村<天正>の圍場整備前のミチは、網の目状に屋敷をつないでいるように見えるものの、その利用に注目すると、主屋正面に向かうアプローチ路と、村落内のカミ・シモを結ぶ主要なミチと、町へ

と続く街道とに区分できる¹⁰⁾。

列状村<東開発>のミチは、屋敷の並びに沿って、マエスジ、ナカスジ、セドスジの3本ある(図5中)。「イエの領域」との関係に注目すると、3本ともその内側を水路に沿って通っていることがわかる。領域の境界上には、水路が通るだけで、ミチはない。

街路村<増山>のミチは、芹谷野用水沿いの両側に通っている(図5下)。このうち一方は、「カイドウ(街道)」と呼ばれていた。また、主屋のセド側に、屋敷を束ねて流れる水路に沿って、セドノミチと呼ばれるミチがある。「イエの領域」との関係に注目すると、領域の内側で、宅地と畑の境界にあたるところに、セドノミチが通っている。これは日常の集落内の行き来に使われている。

以上のように、「イエの領域」との対応からミチの構成を見ると、3つの村落の共通点として、「イエの領域」の内側を通るミチの存在を指摘できる。これは屋敷を束ねる水路と対になり、屋敷と耕地の間を通り、集落内の移動に使われている。圃場整備前のミチは、人が通る幅しかなく、舗装されているわけでもなかった。しかし、村落ごとの屋敷構えの相違は、主としてこのミチ側に生じている。

まず、散村では、集落内移動に使われるミチからアプローチ路が延び、その先に屋敷林を背景とした主屋、クラ、ナヤの構えが正面を向けていた。つぎに列状村では、集落内移動に使われるミチに面した側だけにハドリが連続し、ナヤが漆喰塗り込め仕上げとなっている。さらに街路村では、集落内移動に使われるミチに面したところに洗い場や貯水池が設置されている。このように散村と異なる形態をとった場合も、その屋敷はミチに面した構成要素を変化させており、ミチは屋敷が働きかける対象となっているのである。こうした屋敷の内側からの論理により構成要素が変化した部分において、村落ごとの景観の違いが生まれ、村落の個性ができていく。

列状村<東開発>のミチは、端的にこうしたミチの性格を表している。それは「イエの領域」の内側を通っているのである。これはミチが私的な領域の中にありながら、利用においては集落という社会に供することを認められていたことを示している。ミチが屋敷の側から働きかける対象となり得たのは、このような所有と利用の関係があったためと考えられる。

5 形態の異なる村落の共存

砺波平野では、同一の気候・地勢条件の中に、散村や列状村や街路村という村落形態のバリエーションが見られる。地理学分野の研究では、このうち集村の起源が古いとされている。しかし、これまでの検討により、散村と列状村と街路村の成立は、いずれも同じ近世前期とわかった。そして、屋敷構えと集落構成を分析した結果、列状村や街路村が集村化している理由は、地理的条件よりも計画性によるものと把握できた。

近世の砺波平野では、旧河床の開拓が散居を前提として進められた。散居は、計画者にとって小資本で継続的に新田開発を進めることができ、居住者にとっては生産活動を空間的に自立したものにすることができる、双方にとって利点のある計画となっていた。さらに散居は、固定的な計画ではなかった。そのため居住者が働きかける余地のあるものとなっていた。水路が「イエの領域」の境界となり、ミチに段階性が生じ、屋敷構えが水路の方向によって秩序づけられていった。一方、列状村や街路村では、より強い計画性が働いた。これは直線的な水路や矩形の敷地割りに認められる。ただ、散

村と同様の「イエの領域」が確認されること、その位置を考慮して水路やミチが設定されていることから、居住のモデルは、散村と共通していたことがわかる。列状村は、河川に近く、洪水に対する危険があった。それに対処するため、散村とほぼ同じモデルのまま、水路のカミ・シモ方向に「イエの領域」を切り詰めて、隣接させたかたちと捉えられる。そこでは、居住者による働きかけとして、屋敷林やハドリ(石垣)のユニット化が見られる。洪水対策上重要な要素を相互負担し、集落景観の主眼としていることがわかる。

また、街路村は、段丘上に立地し、水源が一つの用水に限られていた。こうした立地条件に対応するため、屋敷を用水の両側に向かい合うように並べ、セド側だけに耕地が広がるという、かなり変形した「イエの領域」モデルを採用している。ここでも、居住者は、その設定に対応して、屋敷林やハイナヤを芹谷野用水沿いに集中させ、街道沿いの並木道という集落景観を作り出している。

以上で見てきたように、村落のしくみ自体は、共通する原理に基づいている。一方、各村落で集合のための理由は異なっている。それに対して、計画設定と居住者による働きかけがなされることにより、村落ごとの固有の景観がもたらされているのである。そして、現在のような異なる村落の共存する状況が生み出されたと考えられる。

謝辞

まず第一に、調査に快くご協力下さった<天正>、<東開発>、<増山>の方々にお礼を申し上げたい。また、研究を進めるにあたり、砺波市郷土資料館の佐伯安一氏・新藤正夫氏、庄川町教育委員会の榎木淳一氏、井波町教育長の吉藤一郎氏、井口村の塚崎正一郎氏に、多大なお力添えを戴いた。そしてこの研究は、実測調査を含めて、鈴木成文(神戸芸術工科大学)、伊藤裕久(東京理科大学)、小川暁子・金子裕子・斎藤朝秀・大沼徹(当時:東京大学)、佐伯ゆかり・横井普・石塚勝広・伊藤司(当時:新潟大学)の各氏と共同しておこなったものである。ここに衷心よりの感謝の意を表したい。

参考文献および注

- 1) 黒野弘靖・菊地成朋「村落形態の分類とその領域構成 - 砺波散居村における居住特性の分析 その1 -」日本建築学会計画系論文集, 第477号, 1995年11月, pp. 117-124。
- 2) 黒野弘靖・菊地成朋「村落と屋敷の対応関係からみた散村の構成原理 - 砺波散居村における居住特性の分析 その2 -」日本建築学会計画系論文集, 第507号, 1998年5月, pp. 151-155。
- 3) 黒野弘靖・菊地成朋「列状村の集落空間とその水系・ミチへの連関 - 砺波散居村における居住特性の分析 その3 -」日本建築学会計画系論文集, 第520号, 1999年6月, pp. 213-217。
- 4) 黒野弘靖・菊地成朋「街路村における街路と水路の中心性と屋敷構えとの関係 - 砺波散居村における居住特性の分析 その4 -」日本建築学会計画系論文集, 第537号, 2000年11月, pp. 165-170。
- 5) 前掲書1) 第2節と第3節 pp.118-120、前掲書3) 第2節 p.214、前掲書4) 注3) p.170を参照。
- 6) 前掲書3) 第4.2節の説明と図4 pp. 214-215を参照。
- 7) 前掲書4) 第4.1節の説明と写真1 pp. 166-167を参照。
- 8) 砺波地方の建物呼称として、「ナヤ(納屋)」は、「コヤ(小屋)」よりも格が高いものに使う。
- 9) 街路村は段丘上に立地するので、ハドリは洪水防御の役割をもたない。
- 10) 前掲書2) 第4.1節と第4.2節の説明および図5 pp.153-154を参照。

(2000年12月10日原稿受理, 2001年4月24日採用決定)